

集いの地「かづの」への想い

かづの 鹿角市長(秋田県) **児玉** こだま ひとし 一

Hitoshi Kodama



「かづの」の地域

皆さんは、これまでに秋田県を訪れる機会があったとしても、わがまち「鹿角」を訪れたことはあるでしょうか。

鹿角市は北東北(秋田・岩手・青森)3県の中央に位置し、県庁のある秋田市からは、幹線道路の改良が進んでいる現在でも、移動には車で2時間半を要します。一方、隣県の盛岡市や弘前市には東北自動車道が縦貫しているため1時間圏内であり、生活圏としてのつながりも深いです。こうした県境に接する地域は全国にもたくさん存在しますが、この地はひと際ユニークと言える特徴があります。

歴史をひも解くと縄文時代から人々の生活があり、多くの伝説からも古代より中央との行き来があったことが窺えるのですが、近世まで下ってみても、藩政時代には南部盛岡藩に属しており、南北方向の鹿角



ユネスコ無形文化遺産の「大日堂舞楽」



「小倉百人一首かるた競技全国大会」の開会式であいさつをする筆者

街道を軸として東西南北に通じる道が整備され、外部からは多種多様な文化が流れ込み、「人」と「モノ」が行きかう交通の要衝として発展してきました。

そのような背景の中でも、特筆すべきは尾去沢鉦山を始めとした有数の金属鉦床を代表とした豊富な資源をめぐり、争奪戦が繰り広げられた戦いの地でもあったということです。

明治4年には秋田県へ編入されることとなりましたが、小説家の司馬遼太郎が自身の著「街道をゆく」で、鹿角を日本のアルザス・ロレーヌ(フランスとドイツの歴史的な係争地)と表現したことに歴史像を重ねることができま

す。今現在も南部の文化を色濃く残しつつ、秋田県となってからの歴史も織り交ざる



「量の格闘技」ともいわれる「小倉百人一首かるた競技全国大会」

「かづの」と言う地の発展に、先人の様々な思いを浮かべますと、3期目となる市政への取り組みに向かって、最前線で戦う気持ちが湧き上がってくるのです。

第29回国民文化祭の開催

昨年は、国内最大の文化の祭典である「国民文化祭」が、秋田県で初めて開催されました。

県内25市町村を舞台に、100を超える事業が約1カ月間にわたり繰り広げられましたが、本市では、ユネスコ無形文化遺産に登録されている大日堂舞楽が伝承されていること、また、県内でも競技かるたが最も盛んな地域であることから、「神楽フェ

ステイバル」と「小倉百人一首かるた競技全国大会」を実施しました。

大日堂舞楽は、およそ1300年前の養老2年に元正天皇の命により大日社再建の折、名僧行基に伴われて来た楽人により里人に伝えられたといわれる舞楽です。多くの研究者から大変古風な舞であり、奇跡的に今日まで伝承されて来たものと驚嘆されています。

舞楽を伝承するために地域の四集落で舞を分担し、これを継承するために地付神役（舞楽に携わることにより田畑を耕作する権利を与えること）と呼ばれる手段を用いて、明治維新まで厳重に行われてきました。この舞楽の舞人・楽人は能衆と呼ばれ、現在でも役柄により約2週間から5日間ほど間口に注連縄を張り、行と称して精進潔



全日本かるた協会の山下会長(左)と筆者

斎をして奉仕します。さらに、舞人は神子舞、神名手舞の2つの舞を繰り返しながら、人から神へ化身するものとされているのです。

神楽フェスティバルでは、大日堂舞楽の他に、東北地方のすべてのユネスコ無形文化遺産が集まりましたので、各地域に伝わる文化の魅力や奥深さを肌で感じ、文化遺産の保存伝承の重要性を再確認する貴重な機会となりました。

文化の社交流館「コモッセ」オープン

今年4月16日には十数年前から建設を望む声のあった文化ホールと市民センター、子育て支援施設、そして図書館から成る複合施設「コモッセ」がいよいよオープンします。

市民の多様な芸術文化活動の拠点として、また、地域固有の民俗芸能とのふれ合いや新たな芸術文化鑑賞機会の提供など、これまでにない充実した環境が整うこととなります。

総事業費は約44億円という一大事業でありますので、市民の悲願成就のため、これまで熱い議論を重ね、各方面へどれだけ奔走したかわかりません。

私は市のかじ取りを任される前にも市職員として長らく行政に携わってまいりましたので、本市の理想的な文化ホールの在り方については、折に触れ市民の声と向き合ってきました。それだけに今年のオープ

ンには、何か運命的な仕事のめぐり合わせを感じています。そしてまた、周辺の中心市街地を含め、まちのにぎわい創出には特別な思いを抱いているところです。

鹿角は歴史文化のほかに、紹介しきれないほど多くの資源を有しています。「コモッセ」によって、本市の持つ都市機能にこれ以上ない魅力が加わったことは間違いないありません。

地域や鹿角人が持つDNAに深く刻まれた営みが再び呼び起こされ、将来に渡って息づく文化が継承され、ふるさとの発展に大きく貢献することを確信しているのです。



4月にオープンする文化の社交流館「コモッセ」の外観イメージ